それからの
モモ
AM JuJu
首藤剛志 作
わたなべひろし&けいこ 絵

それからのモモ

作者　首藤剛志（しゅどうたけし）

昭和24年８月18日、福岡県生まれ。TVアニメーション「魔法のプリンセスミンキーモモ」(57.3.18~58.5.6)の原案者、脚本家。わたなべひろしが描いた久し振りのモモに対面し「モモもおとなになったね」と父親の発言。

現在「アニメージュ」(小社刊）に小説「永遠のフィレーナ」を執筆中。

絵　わたなべひろし＆けいこ

昭和57年６月20日**「モモ」**のスタートとほぼ同時期に東京・下井草カトリック教会で結婚。以来、夫婦でアニメ・イラスト・まんがを協力作画。将来の希望「秩父の山奥で仕事(アニメ)を」(ひろし＝S.35.2.11生)「サザエさんのような家庭を」(けいこ＝S.32.11.8.生)

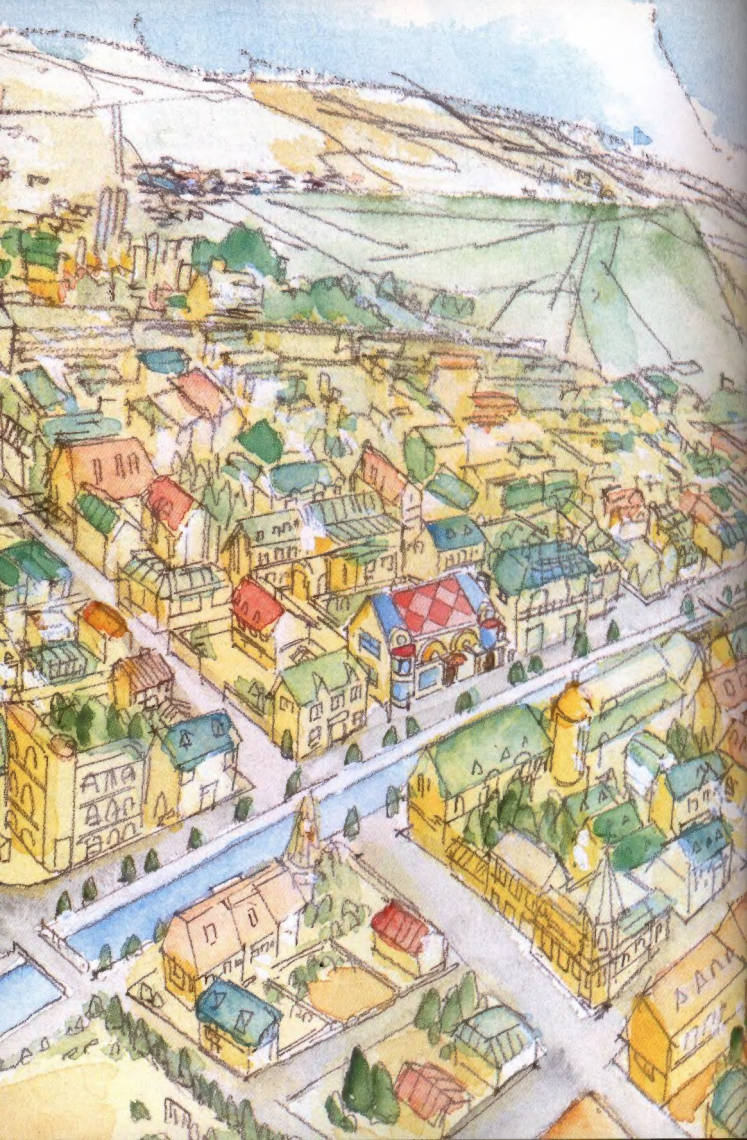
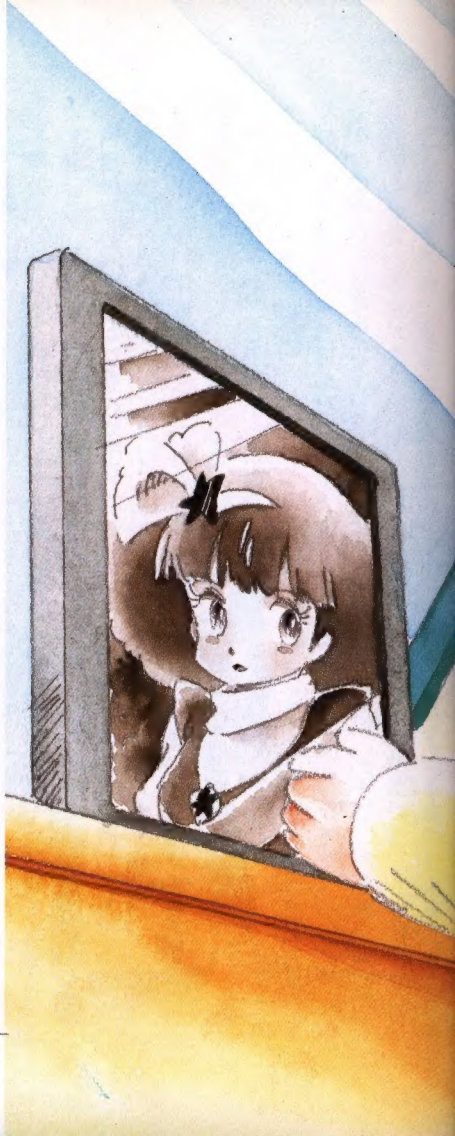
この物語は
いつものようにはじまります

AFTER…

それからのモモ
MOMO, AND

首藤剛志――作
わたなべひろし&けいこ――絵

CONTENTS

むかし、むかし――
と、いっても、ちょっとだけむかし。
いえ、もしかしたら、ほんの少しだけ
未来のいつかかもしれません。
　どこかの宇宙のどこかの地球のどこか
の街にひとりの女の子がおりました。

女の子の名前はモモ。どこかの街のペットショップのひとり娘でした。ひとり娘といっても、昔、モモと同じ名前のお姉さんがいて、モモが生まれる前に交通事故にあい、遠くへ行ってしまったと、パパやママから聞かされていました。

12歳の誕生日
なにかが見える

モモは、世界的に有名な獣医さんのパパや、いそがしいパパのかわりにペットショップをひとりできりもりしているママや、3匹のペットに囲まれて、すくすくと育っていきました。

あっ、そうそう、3匹のペットの名は、老犬のシンドブック、小鳥のピピル、小猿のモチャー、不思議なことに3匹は、何年たっても歳をとらないみたいでした。

月日が流れ、モモは12歳の誕生日をむかえました。12歳は、モモのお姉さんが交通事故で、どこかへ行ってしまった歳でもありました。

でも、そのことにふれる人はいませんでした。12歳になったモモを見ているとお姉さんを思いだし、なんとなく、つらくなるのです。もっとも、モモにはそんなこと関係ありません。だって、モモはどこにでもいるふつうの元気な女の子です。生まれてくる前の出来事に興味を持つより、いまを楽しむことで精いっぱいです。ほら、モモが、おうちに帰ってきました。えっ? これが、ふつうの女の子?……でもママはこともなげに聞きます。

「今日は何人とけんかしたの?」

「6人……だって、あの男の子たち、女の子をいじめるんだもん」

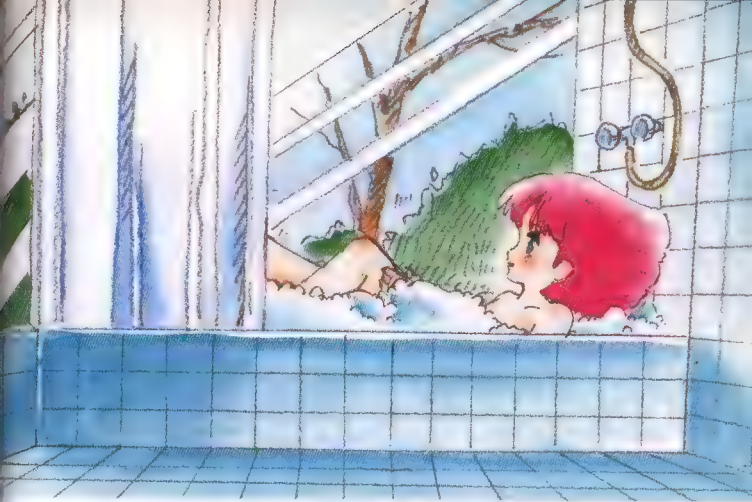
「で、勝ったの? 負けたの?」

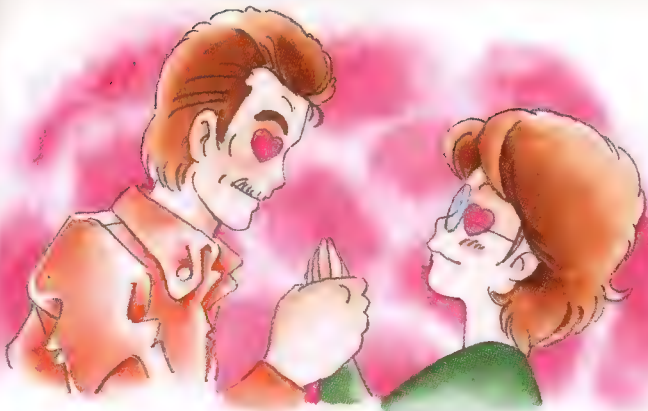
「もち、勝っちゃった」

「そう、いけない子ね。早くお風呂に入って服を着がえなさい」

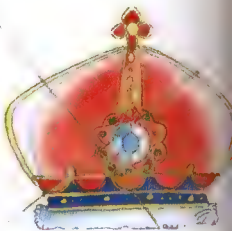
モモが、居間を出ていくのを見送ると、ママはにっこり笑いました。

「モモの今年のケンカ、59戦59勝。うん、いいできね。私って、いけないママかしら?」

ママはペロリと舌を出しました。

ゴシゴシ、ジャブジャブ。モモもやっぱり女の子。お風呂大好き少女です。
髪の手入れは念入りに……お気に入りのヘアバンドをつければ、泥だらけのおてんば娘が、小さなレディに大変身……。
「うん、よろしい……12歳のモモ。こんにちは。さあ、あなたのデビューよ」
鏡のなかのモモは、コクリとうなずいたようでした。

「わっ、これをわたしに？　サンクス、パパ」
モモは目を輝かしてパパにキスをしました。
パパは誕生日のプレゼントにカメラを贈ってくれたのです。
そのカメラは12年間、モモを見つめてシャッターを切りつづけたカメラでした。
「いままでは、パパとママの思い出としてモモを写してきたけれど、これからは、モモの見たもののなかで、モモが思い出として残したいものを撮りなさい」

そして、ある日、突然に……
「ロンドンへ！　お引っ越し？」
パパは、ロンドンの大学から、動物学の研究をやらないかと誘われたのです。
「長いあいだ世界中を飛びまわってつづけてきた動物の病気の研究をまとめてみたい気もするし、それよりなにより、パパはいそがしすぎて、家にいられなかっただろう、そろそろ家庭をたいせつにしてもいいころだと思ってね」
パパとママは、見つめあいます。
「でも、イギリスって、どこかの国語が通じましたっけ！」
「まさか、イギリスは英語だよ」
「きゃび！　モモもママも英語なんてできゃしないわ」
「なせばなる！　モモ、明日から勉強！」
ママはずもももと燃えています。
「えらいことに、なってしもた！」

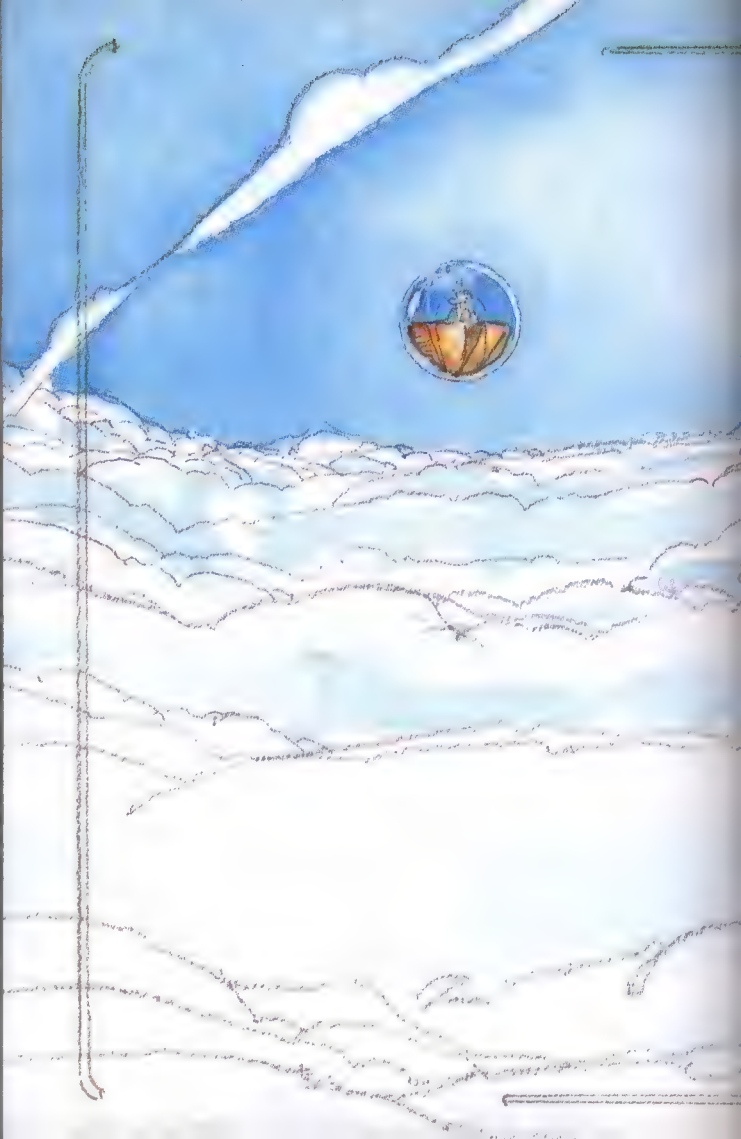
「いやだ！　みんなと別れるなんて！」
出発の日、モモとパパとママは飛行機でロンドンにいくのですが3匹は別……
動物を飛行機にのせるには面倒な手つづきがいるので3匹は船にのせられて、2カ月もかけてロンドンに行くのです。

モモと3匹がそんなに長いあいだ、別れるのは、はじめてでした。
「かわいそうなモモ……」
夢の国、フェナリナーサでは、王様と王妃様が思わずもらい泣き……
おふたりは、ずーっと、夢の国からモモを黙って見守ってきました。
だって、昔、地球に夢を与えにやってきたのに、交通事故でなくなってしまったたいせつなひとり娘、魔法のプリンセス、ミンキーモモが地球の人間として生まれ変わった姿がこのモモだったのです。

もちろん、モモは、人間として生まれる前のことは憶えていません。魔法だって使えないし、魔法のプリンセスだったころは、お話しできていた、3匹ともしゃべれません。
人間には、それがふつうのことだからです。
でも、ことばはわからなくても、3匹とモモは友だちでした。
ブルルル……
3匹をのせたトラックはモモを残して港へむかって走りだしました。
「2カ月の船旅か、しんどいこっちゃ」
「旅っていったって、動物のおいらたちは鉄格子のオリのなかで暮らすんだぜ」
「いやん、いやん、牢獄の美女なんて……それに潮風は、美しい私の美容の敵」
3匹は、うなずくと、港についたトラックから逃げだしました。
「これから、どこかの街に戻ったのではまにあわんかもしれんな」
「ならば、飛行場……いくべし」
3匹がどこかの空港にたどりついたとき〝どこかの航空・ロンドン行き〟は離陸寸前でした。
「あわわわ、急げ!」
3匹は、滑走路を駆け抜けると、旅客機の尾翼にしがみつきました。

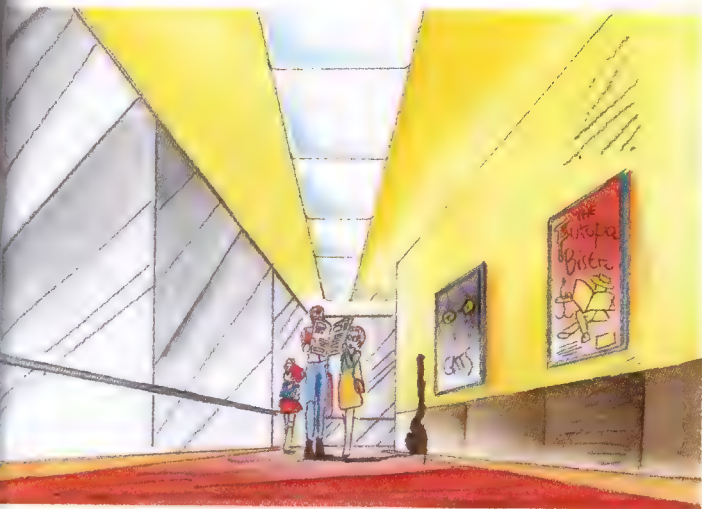
*

そんなことを知るはずもないモモは、3匹と別れてブルーな気持ちでした。でも旅客機が雲の上に出て、それこそ、どこまでもブルーな大空が窓の外に広がるのを見て、気持ちは、髪の毛のようにハッピーピンクになったようです。
もともと、くよくよするのはにがてなモモです。悪いけれど、ちょっとだけ、3匹のこと、心のとだなに入れて……

モモは、目の下に広がる白い雲と、果てしなくつづく青い空を、パパのプレゼントのカメラで写そうと思いました。
　そして、カメラのファインダーをのぞくと……そのときモモには見えたのです。
「なに？　あれ？　もしかしたら、UFOだったりして……うふっ、しんしん興味……」
　モモは、ファインダーから目をはなして、じかにそれを見ようとしました。見えませんでした。まともには……
「変だな？　ともかくシャッター押しておこ」
　カメラをかまえなおしたとき、もう、不思議なものは雲にかくれて見えませんでした。
　モモは、それを、いつかどこかで見た憶えがあるような気がしました。
　それは、人間になったモモが、はじめて見た、フェナリナーサでした。

モモINロンドン
逃げろや逃げろ

旅客機のなかで一夜が明ければ——
霧です。
イギリスです。ロンドンです。
鼻の先も見えない濃い霧のなか、モモたち乗客と、おまけに、翼の上に3匹をのせた飛行機は、無事にロンドンのヒースロー空港に着陸しました。
送迎用の出入口から降りるモモたちはともかく、滑走路に降りた3匹は、とほうにくれてしまいました。
なにしろ、右も左もまっ白闇？ です。

3匹は手さぐり足さぐり鼻さぐり、小鳥のピピルは、もちろん羽根さぐりで霧をかきわけて進んでいきました。
ドスン！　モチャーとシンドブックがだれかにぶつかりました。
「ん、だれ？」
「オー　マイ　ゴッド！　立入り禁止の滑走路に動物がまぎれこんでいる！」
なんと、それは、鉄かぶとをかぶった兵隊さんでした。
「追え！　飛行機事故のもとだ。殺してもかまわん！」
そんなことといわれたら、逃げないわけにはいきません。
「なんてこっちゃ、イギリスは動物保護のうるさい国だって聞いとったに」
なぜか、滑走路には、ずいぶんの数の兵隊さんがいて、3匹を追いかけます。

「なんだか、兵隊さんがいっぱいいね」
ママが、新聞を読むパパに聞きました。
「ああ、3日後にロンドンで、国際平和会議が開かれるそうだ。世界中のおえらいさんが集まってくるから、警戒が厳重なんだよ」
モモは、パパとママの話に耳をかさず、……つまんないの、霧で、なーんも見えないなんて……
ところが！
「モチャー!!」
「どうして、こんなところにモチャーがいるの？」
「モモ！……」
モチャーは、そう叫ぶと、ガラス窓の外をずり落ちていきました。
「追え！ 逃がすな！」
兵隊さんたちが追いかけます。
「助けなきゃ！」

モモは、いきなり走りだしました。
「出口は……出口はどこ？」
モモは、やっと見つけた出口の前で兵隊さんに見つかってしまいました。
「おじょうちゃん、外へ行っちゃいけないよ」
と英語でペラペラ。
ことばなんてわからないもん。
うーん、じれったい！
モモは、いきなり兵隊さんの足をけっとばすと、
「アイム　ソーリー！」
滑走路にとびだしました。
「国際会議の警備のため、この空港の立入り禁止地区であやしい動きをしたものは、動物、人間を問わず、発砲してよいという命令がでております。娘さんは、そこをうろついているのです」
パパとママは、呆然です。

「わー、えらいことだば！　だばだば」
フェナリナーサでは、王様も王妃様も大あわてです。
「かくなるうえは、フェナリナーサの航空管制パワーを最大にして、飛行場の外にモモたちをさそいだすのです」
「だば、フェナリナーサの3匹はともかく、モモは人間だば、フェナリナーサのパワーがわかるだばか……」
「わかりません。でも、あの娘のどこかにフェナリナーサスピリッツが眠っていたら、感じてくれるかもしれません」
　モモは、霧の滑走路のどこをどう歩いているのかわかりませんでした。
　ただ、なんとなく、こうやって歩いていると、いつかきっと3匹に会える……しだいにそんな気が強くなるのです。
　そして、とうとう。
「ピピル、モチャー、シンドブック

「すごい！　会えたわ！」
「ほんと、うそみたい」
「ほんと、ほかぁ、幸福だなぁ」
「信じられんこっちゃ……」

「モモも、ベリベリ　ハッピー！」
そこまでいって、モモと3匹はびっくりです。
「ティーチ　ミー　ホワイ、なぜ私たち、しゃべれるの!?」

「それはじゃな」
シンドブックは、いいかけて口をつぐみました。
……たぶん、モモのなかで眠っていたフェナリナーサスピリッツが少しだけよみがえったのじゃよ……
でもいいませんでした。人間のモモは、人から教えられたのではなく、自分の気持ちで、フェナリナーサを憶えていません。人間フェナリナーサを信じなければ、フェナリナーサの住人と仲よく暮らしてはいけないのです。
シンドブックは、フェナリナーサのことはいわずに、こう説明しました。
「たぶん、モモが、わしらと話したいと心から思ったから気持ちが通じたんじゃろ」
「そか、ことばって、相手と本気で話そうと思えば、通じちゃうものなのね」
そのとき、ガサガサというもの音がして、女の人の話声が聞こえました。
それは、英語でしたが、残念……やっぱりモモにはわかりませんでした。
滑走路で追われつづけたモモたちは思わず、しげみの影に身をひそめました。
「密輸した時限爆弾、うまく運びだせたわね」
「これで、3日後の平和会議のおえらいさんを、テッテー的にぶっとばしちゃうわん」
「じゃ、とりあえず、このしげみの下にかくしておこうじゃん」
ふたりの女の人は、爆弾の入った木の箱をかかえると、しげみの下へ運びました。
しげみはモモたちのいるしげみで――
霧のなか、女の人たちとモモは、顔をしげしげとつきあわせてしまいました。

「!!」

女の人の英語がすごんでいます。

「見たわねぇ〜〜〜!」

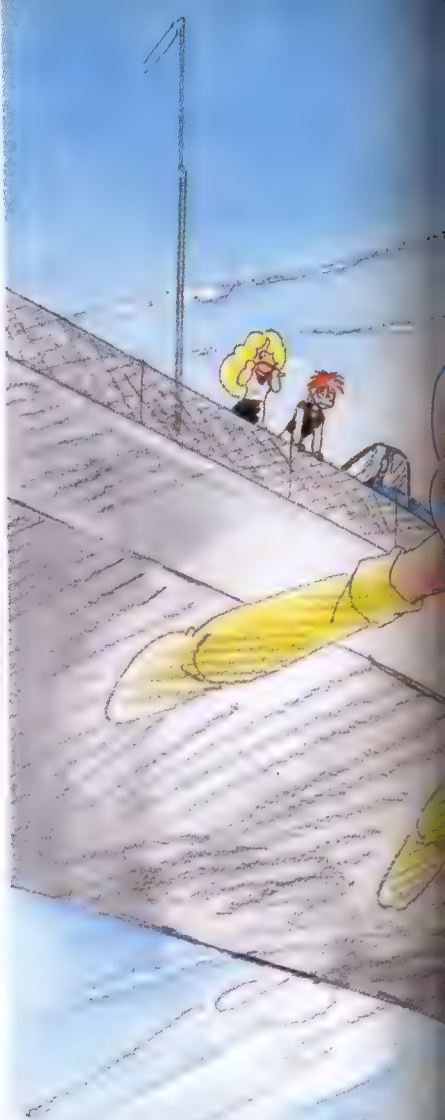
「見ないないない。声は聞こえたけど」

……モモが英語をわかっていたら、そう答えたかもしれません。

「かわいそうだが、死んでもらいます」

女の人は、ふところからピストルをとりだしました。ピストルはだれが見たってピストルです。いくらイギリスのピストルだからって、それぐらいモモにもわかります。

「逃げろ、モモ!」
モチャーとシンドブックが、女の人にとびかかります。「今だ!」
モモと3匹は、夢中で逃げます。
プシュ! プシュ! 近くで妙な音がはじけます。消音銃の音です。
「たいへん! やばい命がけでやばい」
走って走って、走りまくって、やがて林のむこうに白い道が見えてきました。
運よく、トラックが止まっています。
モモたちはトラックの荷台に飛び込みました。ふっとひと息ついたと思ったら、バタンとドアの閉まる音がして、トラックが走りだします。
3匹は、なにげなく荷台の窓から運転席をのぞきこんで、ギョッ!
運転席の人もなにげなくふりかえって、
「いたなあ~ッ!」
なんと、あのふたり組です。

キーッ!! 急ブレーキでトラックが止まります。
そこは、いつのまにか立体交差のハイウェーでした。
モモたちは、トラックからころがり落ちるように逃げだします。
でもトラックのスピードにはかないません。とっさに見降ろしたハイウェーの下の道を、別のトラックが走ってきます。
「いまだ! ジャンプ!」
ふたりの女の人は地団駄ふみました。
「なんとしてでもさがしだしてやる」

「やったね」
「でも、どうしてこんな目にあうの？」
シンドブックがわけしり顔で、
「たぶん密入国したということかの……
モモはパスポートを持っているのかの」
「そんなのしらない。きっとパパとママが持っているんだわ」
考えてみれば、モモは入国手つづきもせずに、空港の外に出てきたのです。
「それできまりじゃ、わしらは密入国者……警察にも追われる犯罪者になってしもた」
どうやら、英語のわからないモモと3匹には、先刻の女の人たちと兵隊さんたちの区別がつかなかったようです。
「パパとママをさがさなきゃ」
「警察で聞くわけいかないし……」
やがて、モモと3匹をのせたトラックは、ロンドンの街へ入っていきました。

木々の豊かな広い公園のなかで、トラックは止まりました。トラックは公園の芝生を運んできたのです。
モモと3匹は、こっそりトラックから抜けだしました。
「どこにいけばいいのかのう……」
「なるようになるわよ。せっかくの公園ですもの、写真にとっておこ」
モモは、パチリ、パチリとシャッターを切りはじめました。
「あら？　あなたはだれ？」
ファインダーのなかに小人が見えます。
「えっ？　ぼくが見えるの？」
「うん、カメラをとおして見るとね」
モモがいうとおり、その小人はカメラごしにしか見えません。小人はがっかり。
「ほんとうはぼく見えないんだね」
「待って！　見ようとしてみる」
モモはカメラを離して見つめました。
すると、最初はぼんやりと、やがて、はっきりと小人の姿が見えてきました。
「見える。見えたわ！」
「ほんと？　オーッ、天はぼくを見放さず！　ミーは古代イングランド人御用達、生粋（きっすい）のロンドン妖精……アーサーです」

ハローフレンズ

自分の夢はどこに

「ぼくはあなたのように妖精の姿を見ることのできる人をさがしていたのです」

そこまでいって、アーサーは肩を落としました。

「でも、これだけさがして、たったひとりじゃあね」

「なんか、わけあり？」

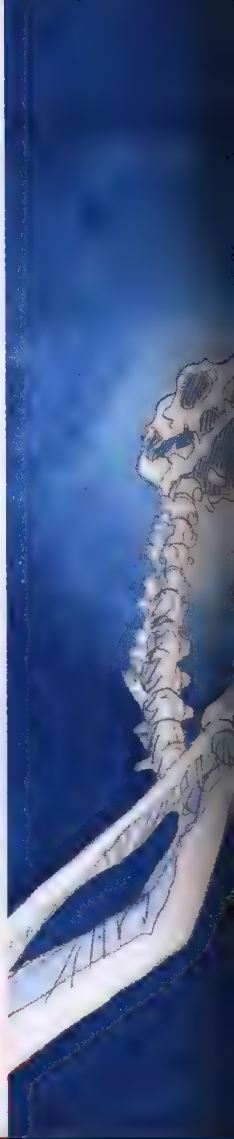
「大ありです」アーサーは、ポツリポツリと、でもイギリスの妖精らしくすじみちを立てて話してくれました。

「大昔、このロンドンのあたり一面には妖精の王国があり、人間たちと仲よく暮らしていたのです。でも、人間が増え、人間同志の憎みあい、いさかい、戦争が起こりはじめると、人は、しだいに妖精の存在を信じなくなったのです。人から信じてもらえない妖精は消えていくのがさだめです。科学が発達して、ロンドンの自然を、レンガの建物がうめつくすようになると、ますます妖精の数は減り、いまや、この公園だけが生粋のロンドン妖精のすみかになってしまいました。そして、とうとう最後のときが近づいたのです。3日後の満月の夜、12時までにロンドンで妖精を見て信じる人が1000人以上いなければ、妖精の国は消えてしまうのです。いまのところその数は300人以上足りません。仲間の妖精たちはその人たちを見つけようと街中を飛びまわっていますが見つかりません。ぼくは もう、くたびれてしまって……ぼくらは本場の妖精の格式にこだわりすぎ、日ごろのPRを忘れていたのです。そのむくいですよね

フェナリナーサの王様は、歴史年表を見てつぶやきました。
「そうだっただば。誇りの高い妖精たちは、がんこに自分たちの夢を守ってフェナリナーサの夢と別れたんだば」
「フェナリナーサと別れた夢の国はほかにもいっぱいありますわ。みんなで力をあわせて夢を守るべきだったのに……」
「そりゃ、夢にも派閥ってもんがあるんだば……」
「ところかわれば夢もかわる。人がかわれば希望もかわる。どうにもならないんでしょうか……」
王妃様はさびしそうにうつむきました。

＊

イギリス人でもなく、まして妖精のことなど考えたこともなかったモモに、なぜアーサーの姿が見えるのか、モモには見当もつきませんでした。
でも、ロンドンに来てはじめてできた友だちです。パパとママに出会えるまで、モモたちはアーサーを手伝うことにしました。それにロンドンにくわしいアーサーがいれば、なにかと便利です。
「じゃまだぜ！」
そのとき、男の子がモモにぶつかり駆けていきました。
モモのポシェットのふたが開き、おさいふがありません。
「スリだ！　待て！」
モモと3匹とアーサーは、めちゃくちゃに男の子を追いかけました。
いままでは逃げまわっていましたが、どっちかっていうと、追いかけるほうが性に合っています。
「ぜったい逃がしたりしないもん」
追います。追います。[illegible]そのう
ふんを撒らす[illegible]追いかけ[illegible]。

モモは男の子を追って博物館にとびこみました。
「わっ!? なにこれ!」
大昔、地球に生きていた恐竜の化石でした。モモは化石たちの歌声が聞こえたような気分にさせられました。
それは、地上から滅びさったものの、さびしさを歌っているのかも……
オット! モモには、恐竜の悲しさにひたっているひまはありません!
博物館から出ていく男の子を見つけて、
「逃がさないもん。ちょっと待って!」

男の子は、ロンドン名物の2階建てバスに飛び乗ります。
駆けっこなら負けないもん。バスなんかに負けてたまりますか！
あらら、ほんとうに負けてません。だって混雑している街のなかですものね

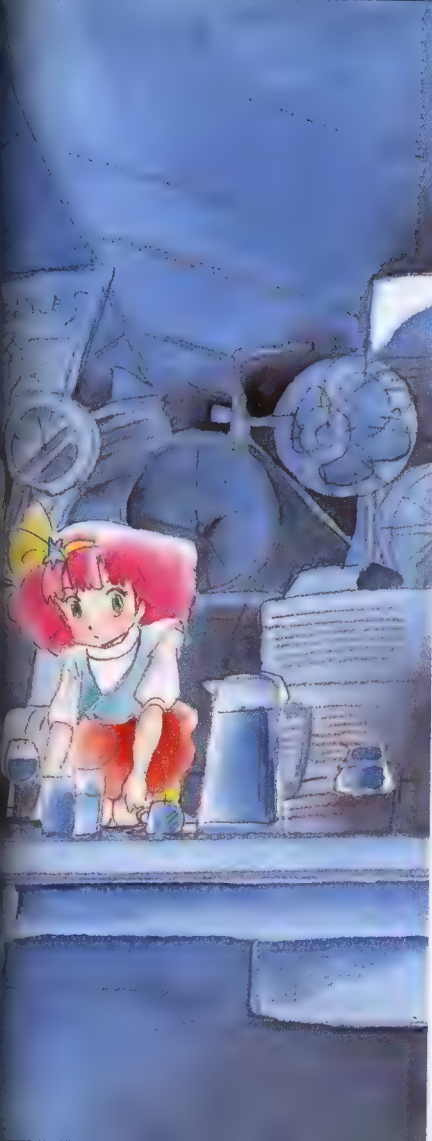
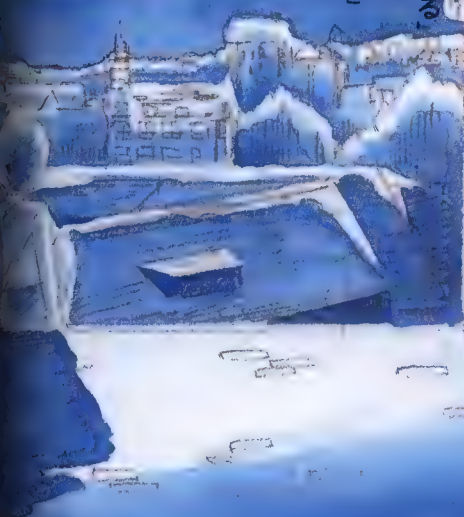
バスから飛び降りた男の子は、地下鉄のエスカレーターを降りていきます。モモも、ドドドと走り降ります。エチケット違反？……いいえ、この街のエスカレーターは、急ぐ人は片側を駆け抜けていいんです。

モモは、地下鉄のなかも走ります。
……れれ？ 煙草をすってる人が……
ロンドンの地下鉄には煙草をすってても
いい車両もついているんです。国によっ
下鉄があるんですね。

つぎの駅で地下鉄から逃げた男の子はロンドンいちにぎやかなところに来ました。

ここは若者たちの街……赤や黄色や青い髪がいっぱい。モモのピンクの髪の毛もちっとも珍しくありません。ロンドンをドンドン追っかけっこがつづきます。

夕暮れがきて、夜がきて――
男の子は、崩れかけた工場に逃げ込みました。すると追ってきたモモを、男の子の仲間たちがとりかこんだのです。
「こわがらなくてもいいよ」
年上に見える少年が声をかけました。
「お金を返してあげな」
少年は男の子からさいふを取り、モモに渡しました。
「気にいったよ。街いちばんすばしっこいこいつを、追いつめるなんて……おまけに3匹の動物と妖精までおともにつけて……信じられないよ」
モモたちはびっくりしました。
「アーサーのこと見えるの？」
「ん？……うん……ぼくにはね」
いつのまにかモモは少年と話している自分に気づき、もういちどびっくりです。
……どうしてわたし英語が話せるの？

子どもたちのすみか、工場の屋根裏には、がらくたがいっぱい……みんな子どもたちが盗んできたものでした。
「みんな身よりのない孤児なんだ。いまのぼくらには夢も希望もない。せめておとなになったときには幸福になろうといまのうちから盗んでためているのさ。貧しさのなかから夢は生まれないからね」
「そかな？」モモは首をひねりました。
「それが現実なんだ」
現実といえば、妖精の姿を見ることのできるのも少年とモモだけでした。

少年はモモに聞きました。
「妖精の姿を見ることができるなんて、きみは、ふつうの女の子なの？」
「うん、どこかの国のふつうの女の子」
「そう、ふつうの女の子か……」
少年はちょっとだけさびしい声で、
「帰りなよ。パパやママが心配してる」
モモは困りました。しかたなく、
「行くとこわかんないんだ、わたし」
少年もポツリと答えました。
「ここに泊まればいい……」
「うん……」

少年はモモのために温かいミルクティを作ってくれて、こんな話を始めました。
「昔、地球には、アサナリナーフっていう夢の国があったんだ。でも人々がだんだん夢を失うと地球の底深く沈んでしまった。そこで、人々に夢を持たせようとしてアサナリナーフの王子(プリンス)が地上にやってきたんだ。でも、いまの人間の夢って昔のように簡単じゃなかった。お金や国のちがいや性格のちがいで、メチャクチャ……貧しいと子どもにさえ夢がなくなってきた。もう、その王子には夢を人に持たすなんてできゃしないんだ」
モモは、少年を見つめかえしました。
「わたし、その王子様、おかしいと思っちゃうな。人の夢はともかく、自分の夢はどうしちゃったのかなって……」
「えっ?」
「自分の夢がかなってからこそ人の夢でしょ。人のことばっか気にするのって、いい子すぎると思っちゃうな」
少年は月を見上げてつぶやきました。
「自分の夢なんて考えたことなかった」
「あったかい……このミルクティ……」
モモは、おいしそうに飲みました。

*

フェナリナーサの王様は目をパチクリ。
「あら～、あの子は、裏フェナリナーサのアサナリナーフの王子だったんだば」
「失礼ですわ、裏なんていっては……あちらも、こちらを裏アサナリナーフと思っているかもしれれません」と王妃様。
「それにしても、妖精にしろ夢の国にしろ、今回は大特売だば……」
「それだけ現実のロンドンは複雑なんですわ」
「むずかしいだば……」「こんがらからないうちにつぎ、行こ～う!」

ロンドンでのモモの最初の夜が終わり……グッモーニング……朝ですよ。
「フニャ〜」と、モモはのびをします。
ところが、そんなのんきな朝じゃなかったようです。
「モモ、逃げるんだ！　早く！」
少年が叫びます。
「あん？」
「警察だよ。浮浪児狩りだ！」
「警察？　きゃぴ!?　私も追われてたんだ」
　モモのねむけはしゃっきりぱっちりです。子どもたちは、盗んだがらくたを持てるだけ持ってすばやく逃げていきます。
「に、逃げろったって、どこへ？」
「オレについて来い！」
　少年は、モモの手をひいて、工場の屋根づたいに走っていきました。

です。
「ピーッ！」
　おまわりさんの呼び笛が響きます。
「あそこだ！」
　お巡りさんのひとりが屋根の上のモモたちを見つけました。
　屋根づたいに追うお巡りさんの数はどんどんふえていきます。
「しまった。行き止まりだわ」
　少年とモモたちは、屋根の上の隅に追いつめられてしまいました。
　隣りの建物までは、ずいぶんはなれていて、とても行けそうにありません。
「まかせておけよ」
　少年はニッコリ笑って、するすると手品のように長いロープをポケットから取り出しました。そして、隣の建物の煙突めがけて投げて巻きつけると、

ペンダント

どこかで音

ジャンプ。
着地成功、むこうの屋根です。
「やったぜ！」
「うん！」

「なんてガキどもだ！」
工場の屋根の上で、くやしがっている
おまわりさんたちをしりめに、少年とモ
モたちはどんどん逃げていきます。
「おい、いまの女の子の髪、ピンクだっ
たよな」

おまわりさんがつぶやきました。
「そういえば、そうだな」
　おまわりさんは、空港でゆくえ不明になって捜査願いの出ている女の子のことを思いだしました。

*

「えっ？　見つかったんですか？」
　おまわりさんの報告を聞いて、パパもママも大喜びです。
「見つけましたが逃げられました」
　しぶ～い顔のおまわりさんにママはケロリといいました。
「でも、お友だちといっしょにいるんでしょ。だったらひと安心ですわ」
「友だちといっても、われわれが手を焼いている少年泥棒団ですぞ」
「だれとでもお友だちになれるのは、いいことですわね、あなた」
「ウン」パパはニッコリです。

　モモたちは、少年に案内されて下町の古い骨董品屋さんにやってきました。
「ここで盗んだがらくたをお金にかえるんだ。ロンドンは古い街だから、ときどきがらくたのなかにも値打ちのあるものが見つかるんだよ」

骨董品屋のおじさんは、モモのカメラに目をつけました。
「そりゃ、なかなかの値打ちもんじゃ、なんなら、お金にかえてあげようかな」
「これ、パパのプレゼントだから」
モモはていねいに断わりました。
「それより、お店のなかのもの、写真にとってもいいですか？」
「いいとも。ただし、写真を警察には見せんでくれよ。盗品がばれると困るのはこの坊やじゃからね」
おじさんは、少年の頭を軽くコツンとたたきました。
カメラのファインダーをのぞきながら店のなかを歩いていたモモは、腕輪や首かざりがごちゃごちゃとつめこまれている木箱の前で立ちどまりました。
「あら？　これは？」
「どれも役に立たないがらくたじゃが、子どものままごと遊びには使えると思ってな」
モモは、そのなかにとっても気になるものを見つけたのです。
「それは、ペンダントじゃよ。いつの時代のものかはしらんがの」

フェナリナーサの王様はびっくりです。そのペンダントは、フェナリナーサのプリンセスのものにそっくりでした。
「もちろんほんものではありません」
王妃様が王様にいいました。
「昔、フェナリナーサが地球にあったころ、人間のお客様が遊びにやってきて、おみやげでいちばん売れたのが、あのペンダントとTシャツ。こわれやすいおもちゃですけれど、あれだけ売れたんですもの。いまだに地球で残っているものが2、3個あっても、不思議はありませんわ」
「夢の国にしては、せこい商売だば」
「何ごとも維持費は必要です」
王妃様はこともなげにいいました。
モモはそんなこと知るはずもありませんが、なぜかペンダントが気に入って、それを買って胸につけることにしました。

少年は、モモをロンドン名物の飲み屋(パブ)さんに連れていきました。

「こんな店がロンドン中に何千軒もあるんだ。子どもはお断わりだけどオレとこの親父はしりあいさ。昔は宿屋もやっていたからね。今夜はここに隠れよう」

パブのなかは薄暗く、煙草(たばこ)の煙がたちこめて、大勢の人たちがお酒を飲みながら話しています。

「妖精が見たい！　妖精よ、どこにいるのじゃ」突然、白い髪の老人が、酔っ払って叫びました。

「妖精!?」少年とモモはびっくりです。
「だれ？　あのおじいさん？」
パブの親父さんがモモに答えました。
「飲んだくれているけれど、ジョン・オリビエって、イギリスでは泣く子も黙るお芝居の名優さ。でもね、名優も歳をとる。明日の芝居で引退なんだよ」
ジョンは芝居がかった口調でしゃべりはじめました。
「わしは12歳のとき、ピーターパンで初舞台をふんで以来、78歳のいままで、数万回、この街の大劇場で芝居をしてきた。わしが明日演じる芝居は、20年間演じつづけてきた『妖精祭りの男』じゃ」
「妖精祭り？……」
「それは、妖精を愛し妖精とともに一生をすごした男の話だ。この役で世界中の賞をいくつも取った。わしは、だがわしは、ほんとうに『妖精祭りの男』を演じ

ていたのか？　わしは妖精を見たことなどない。そんな男に妖精を信じる男が演じられるのか？　ただのいちどでいい、妖精を見てみたい。だが、そう思いながら最後の芝居が明日に迫ってしまった。わしは、とうとう『妖精祭りの男』の役をつかめぬまま舞台から降りねばならぬ。これが飲まずにいられるか」
「おじいさん。見ることができるわ」
モモが、あっけらかんといいました。
「妖精、目の前にいるもん」
たしかに妖精のアーサーはジョンの目の前にうかんでいました。でもジョンには見えませんでした。
「これは、これは妖精のお姫様、老人をおからかいになるのはおやめください」
わざとらしくお礼をするジョンに、パブのお客さんはドッと笑いました。
……見えてない……仕方ない……
アーサーは、悲しげに首を振りました。
……こんなことって……モモと少年はがっかりして、肩をすくめました。
そのときです。
ふたりの女の人がパブに入ってきました。

「酒でも飲まなきゃたまんないわよ」
「ほんと、この広い街からふたりだけであの娘を見つけだせっこないわよ」
そして、ふたりは、同時に叫びました。
「あ〜っ！　みッけ！」
ふたりはモモに飛びかかります。
少年がモモをかばいふたりに体当り！
ドスン！　ふたりの体は、酔っ払ったお客にぶちあたり！「おどりゃ、なにすんじゃい！」「いてこませ！」まきこまれた客同志が、殴りあいのケンカです。
つづいて、パブの外にいた3匹も飛びこんできたからたまりません。
騒ぎに、さらに油をそそぎ——
ドシン、ガチャーン！
イギリスは紳士（ジェントルマン）の国。でもここはロンドンの下町。昔、火事とケンカはロンドンの華（はな）でした。やる時はやるんです。
パブはもうメチャクチャ！

「いまのうちにトンズラ？」と少年。
「ろんろん、モチ！」とモモ。
少年はモモの手をひいて、パブを抜けだし走ります。
「ここで逃がしてなるものか！」
ケンカをまきおこし、ボロボロになったふたりの女の人もあとを追います。
「しまった！」
ふたりの女の人に追われ、下町の路地を逃げ回ったモモと少年は、行きどまりの袋小路に飛びこんでしまいました。
「もう逃がさへんで！」
「ここなら、だれも見てないし……」
モモと少年を追いつめたふたりは、ギラリ？と、消音ピストルを抜きました。
「かわいそうだけど……」
「死んでもらいます」
ふたりの女の人は、狙いをつけました。
少年は、肩をすくめてつぶやきました。

「しかたない。おとなになるか……」
「えっ？」モモは少年を見つめました。
「だれにも見せたくなかったけれど」
少年は、ポケットからロープを出すとぐるぐる回しはじめました。
そのときです。モモのなかでもなにかが叫びました。
……そうよ、おとなになっちゃお……
モモはペンダントを引き抜きました。
「ピピルマ　ピピルマ　プリリンパ！パパレホ　パパレホ　ドリミンパ！　アダルトタッチで婦人警官になーれ！」
モモは、自分にびっくりしました。
なぜ、こんなことばをしっているの？
そして、モモの体はおとなに変わりはじめ……なんなの？　これは……たしかこの感じは……どこかで昔……そうだわそうだったんだわ。わたしは、フェナリナーサのプリンセス、ミンキーモモ……

モモの姿が婦人警官に変身しおえたとき、モモは人間として生まれる前の自分を完全に思いだしていました。

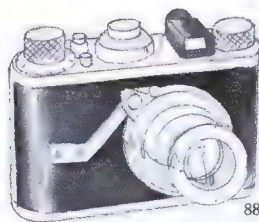
モモたちを追いつめたふたりの女の人は、いきなり子どもがおとなに変身するのを目の前で見せられて、わなわなふるえています。

「ごめんなさいね」

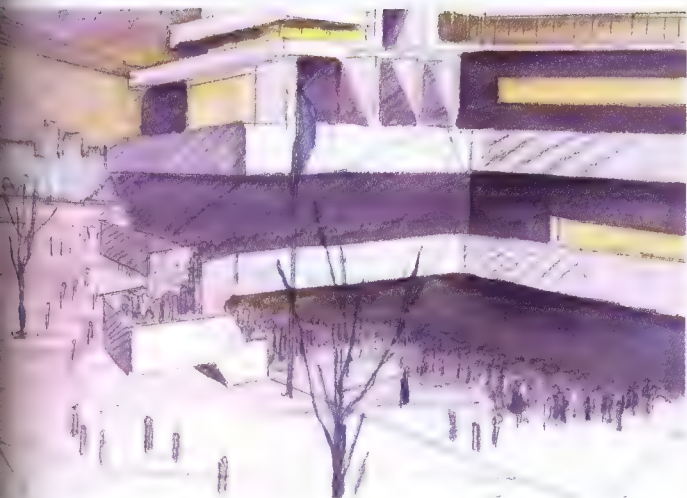
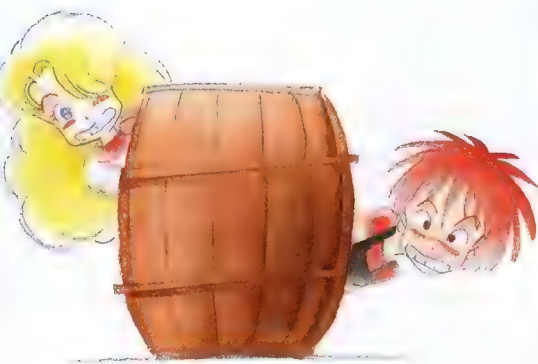
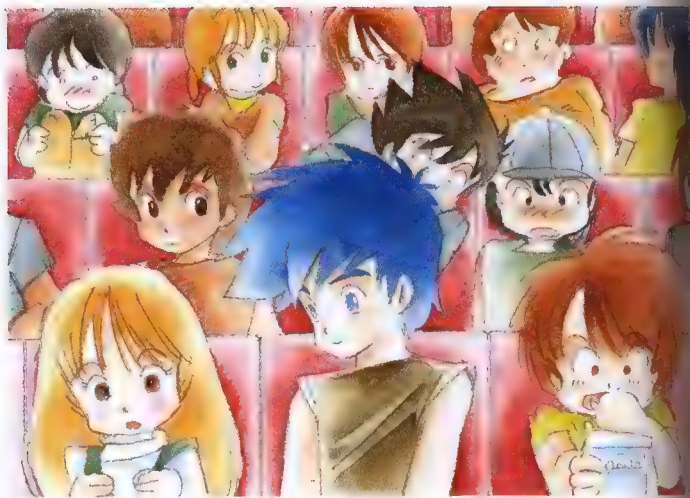
おとなになったモモと少年は、警棒でふたりの女の人の頭をコツンとたたいて気絶させ、駆け足で通りに出ていきました。

モモと少年は、テムズ河の岸を黙って歩きつづけました。
18歳のおとなになれる自分を知ったモモは、なんだかとってもしょげています。
少年がぽつりと話しはじめました。
「……そうさオレ、アサナリナーフの王子なんだ」
「うん……だと思った」
「で、君は……フェナリナーサのプリンセス……」
「ちがうもん」
「え？」
「わたし、ふつうの人間だもん。魔法なんていらないんだもん。魔法の力で自分の夢をかなえるなんてできないと思うもん。わたし、人間のおとなになって、人間のわたしの夢をほんとうにしたいわ」
……生まれる前のことはもう少ししらないでいたかった……せめておとなになる日までは……モモはそう思います……
でもいま、モモはしってしまったのです。
「たぶん、きっと、わたし自分のために魔法をつかうこと、ぜったいしないわ」
モモは、つぶやきながら、なんどもうなずきました。
でなければ、せっかく人間として生まれてきた自分が、全部うそのようになってしまう気がしたのです。
「そんなものかな」少年は、モモの気持ちがわかるような気がしました。
……オレが人間だったら、やっぱりモモのように感じるのかもしれない……けどオレはやっぱり夢の国の王子だし……
「でも……」モモは、気をとりなおして少年にいいました。
「妖精の国を助けるためなら……」
モモはニッコリ笑いました。
「今回だけ、使っちゃおか」

妖精の祭り
きっとどこかで

「またまた、なんでだばぁ？」
フェナリナーサの王様は、びっくりしゃっくりが止まりません。
「あのペンダントは、ニセモノのはずだば。なんで魔法が使えたんだば？」
　王妃様も首をひねりながら、
「はて、わかりませんけれど、夢の国のホンモノニセモノは、現実の人間には、関係ないのかもしれませんわ。現実のモモ、人間のモモが夢や希望を信じるとき奇跡が実現するのかもしれませんわ」

「あのカメラも奇跡のカメラだば？」
「あれは、パパさんが、12年間にわたってモモを撮りつづけたカメラです。モモそのものを見つづけて、モモが見たいと思う気持ちを写してくれるようになったのかもしれません。でも、もうモモにカメラは必要ないのかも……あの娘は自分の目で、見えないものが見えますもの」
「解説、終わり。しかし、はて、だば。……説明はしたものの、これでいいのでしょうかの……は？？」
おふたりは、考え込んでしまいました。

モモは、その夜、飲み屋さんの2階で「妖精祭りの男」の台本を徹夜で読みました。そのころ、妖精のアーサーと少年は、3匹と手わけして妖精を見られる人を捜してロンドン中に散らばっていた妖精たちを呼び戻していました。

「あの子たちもしかしたら妖精かもね」
「信じているのかい？　妖精を……」
「だれにもいわないでね！　私、子どものころ見たことあるんだ、妖精を……」
「えっ？　じつはね、私もなんだよ」
「でもだれも信じちゃくれなかった。そして、気味悪がって仲間はずれさ」
「私なんか、病院送りさ。暗いよね」
「人生、まっ暗闇よ。人の幸福なんてメチャメチャにしてやろうと思ったわ」
「わたしだって……ともかく明日は！」
ふたりは爆弾作戦を決意していました。

つぎの日の夜がやってきました。
テムズ河の畔のナショナルシアターは大にぎわいです。ふつうはバレエとコンサートしか開かれないこの大劇場も、今回は特別です。なにしろ名優ジョン・オリビエの最後の舞台なのですから……
街の名士や、平和会議のおえらいさんが続々とつめかけます。子どもたちにも見てほしいというジョンの気持ちから、無料の席には招待された子どもたちもいっぱいです。
なんとそのなかには、どこから招待券を手に入れたのか、少年泥棒団も、ちゃっかり座っているではありませんか。
もちろん、警戒は厳重で、お客の服装はしっかり調べられ、武器や爆弾を持ち込むすきはありません。
でも、おや？　劇場の売店でお酒を売るふたりの女の人に、見憶えありません

か？　そうです。あのふたりです。そして爆弾は、足もとのビールだるのなかにしっかりと仕掛けられていました。

ベルが鳴り、芝居がはじまりました。

ジョンが、舞台の上で熱演しています。

「おお妖精よ！　姿を見せておくれ！」

舞台の上から妖精役の女優さんが降りてきました。

「あなたに妖精は見えません」

ジョンはびっくりして女優さんを見上げました。台詞(せりふ)がまるでちがうのです。

その女優さんは、変身したモモでした。

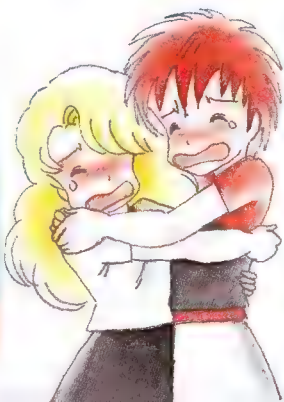
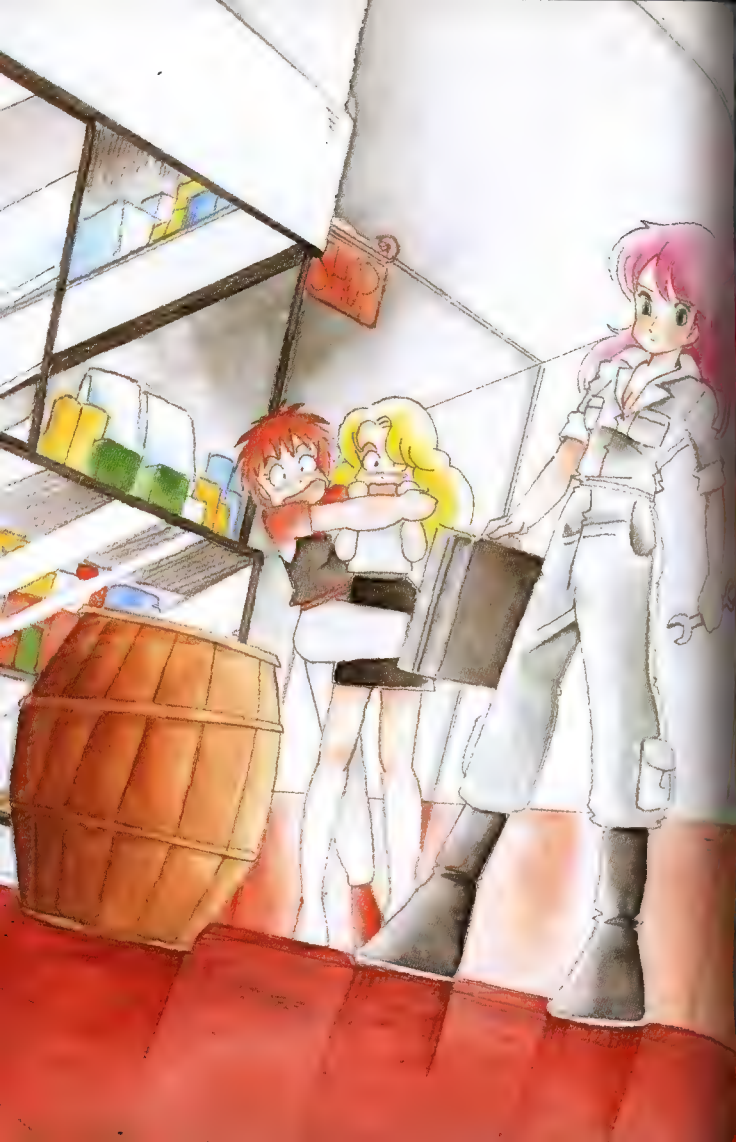
「あなたは、妖精を見たがっているけれど、いまのあなたには無理です」
「なぜだ！　なぜ無理なのだ！」
「妖精を信じていないからです。そして、自分さえ信じていないからです」

＊

売店でテレビ中継を見ていたふたりの女の人は首をかしげました。ふたりは「妖精祭りの男」が大好きでなんども見ていましたが、今日のはいつもとちがうのです。爆弾までには時間があるし、ふたりは舞台のそでから芝居をのぞきました。

＊

「自分をすら信じないとは、どういうことかな？」ジョンはモモに聞きました。
「あなたは、名優です。いろいろな役を演じてきた。でも、お芝居の役になりきろうとして自分自身という役を忘れてしまったのです」
「自分自身の役……？」
「あなたは芝居の役をやっているときがいちばん自信がありました。自分に戻ったときは自信がなくて、いつもお酒にひたっています。妖精は信じてくれる人に見えるものです。『妖精祭りの男』の役で信じても見えてはくれません」
「どうすればいいというのだ」
「あなた自身で妖精を信じてください。愛してください。そうすれば、きっと妖精が見えるはずです」
「わし自身としてか……たしかにわしは、自分を忘れて、芝居の役だけになりきろうとしていたのかもしれぬな」
「さあ、自分自身で見つめてください。妖精の祭りは、もうはじまっています」
ジョンはあたりを見つめました。役者としてでなくジョン本人として……
「おお！」ジョンは息を飲みました。

見えたのです。歌い踊る妖精が……
そして、舞台のそでのふたりの女の人にもそれはたしかに見えたのです。
ジョンは、妖精の祭りのようすを、お芝居の台詞(せりふ)ではなく、自分の心のことばで劇場のお客に話しはじめました。

モモは、そっと舞台からさがって、幕の陰でもとの12歳に戻りました。
「やっぱり、あんたは妖精だね」
ふたりの女の人が涙ぐんでいました。
「きゃぴ！　見たなぁ……」
思わず逃げようとするモモにふたりは、
「ありがとうよ。妖精に会わせてくれて……もう死んでも、くいはないよ」
そこまでいって、ふたりはアッと声をあげました。
「やだ！　ほんとうに死んじゃう」
「どうしよう」
ふたりはオロオロと抱きあいます。
わけがわからないモモに、ふたりは同時に叫びました。
「バクダン、こわーい！」
「ひぇ！　えらいこっちゃ」
モモは、爆弾処理の技師にあわてて変身して売店に走りました。

でも、ビールだるの爆弾は最新式でなかなかはずれません。
　爆弾技師としてのモモの計算では爆発まで、あと5分。仕掛けをこわすまで20分はかかるでしょう。
「まにあわない……」
　いまからお客に知らせても騒ぎが大きくなるだけです。
　……そうだ。あの人なら、いい考えを思いつくかも……
　モモは客席に走ると少年を呼びました。
　客席の人たちは、みんな夢を見るように舞台に見とれています。
「みなさんにも妖精が見えるはずだ！」
　ジョンのことばにお客も妖精の祭りが見えるようになったのです。
　でも、モモと少年は、そんな場合じゃありません。
　あと3分しか時間はないのです。

「オレにまかせろ！」
　少年は、プロのフットボールの選手に変身しました。
　ビールだるをかかえるとものすごい早さで走りだしました。
　なにごとが起こったのかと、とびかかってくる警備の人たちをつぎつぎにはじきとばします。
　残り、7秒、6秒……5秒……
　少年のフットボール選手は劇場の外へとびだすと——
　4秒……3秒……2秒……1秒……
「シュート！」
　ビールだるを夜空高くけりあげました。
　ドカーン！
　爆弾はテムズ河の上空で大爆発。劇場の舞台にも、その音はかすかに聞こえましたが、それは、妖精祭りを祝う花火の音にしか聞こえませんでした。

劇場の舞台で踊っていたのは、アーサーと少年と3匹が手わけして呼んできたほんとうの妖精たちでした。

お客はみんな、ジョンの夢中に語ることばでほんものの妖精を見たのです。

舞台が終わったとき、人々は心から拍手を送りました。

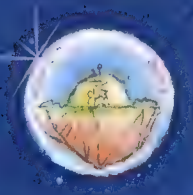
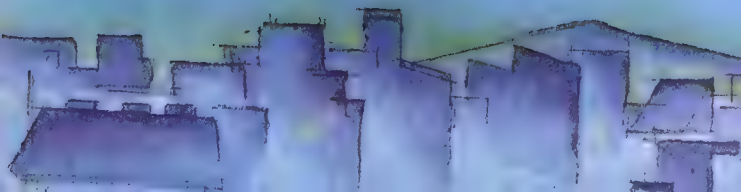
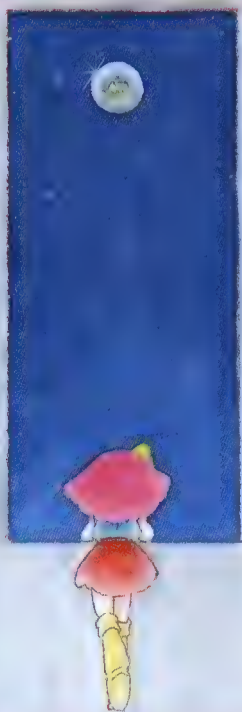
おとなたちは、ジョンの演技と、まるでほんもののように動く妖精を作った美術係を口々にほめました。そうです。おとなたちはたしかに妖精を見たのにほんものだとは信じようとしなかったのです。

信じもせず、ただ、見たというだけで妖精の国を救えるのでしょうか?
いいえ――(NO)
では、アーサーたちの国は消えてしまったのでしょうか?
それもいいえ――(NO)です。
なぜなら劇場で、妖精を見て信じた人は何百人もいたのです。
数百人の子どもたちは、その目で妖精を見てたしかにそれを信じたのです。
満月の光の下、公園の妖精の国では、舞台の上そのままのような妖精たちの喜びの踊りがいつまでもつづいていました。
爆弾を仕掛けたふたりの女の人は警察に自首しました。
ふたりは、変身のできるふたりの子どものことはだれにもいいませんでした。

＊

モモと少年にお別れのときが来ました。
「自分の夢を持てるっていいね……」
「あなただって持てると思う」
「夢の国のオレがふつうの人間のキミからはげまされるなんて、まいったな」
モモはペンダントにふれながらいいました。「これほんとにもう使わないわ」
少年はうなずいてモモにいいました。
「オレは使うよ。オレの魔法を……だって人に夢を見させるのがオレの仕事だから……自分の夢は見られなくても……」
モモはうなずきました。
「がんばってね」
「ああ、モモもね」
ふたりは少しだけ見つめあいました。
「そして、きっと、どこかで……」
ふたりはどちらからともなく、そうつぶやきました。
それから少年は、ふりむきもせず、街の人の波のなかへ消えていきました。

「おかえりモモ」
「ロンドンの街は楽しかった?」
「明日から学校だよ。早くおやすみ」
ほんとうは心配で心配でたまらなかったパパとママは、おまわりさんに案内されておうちにたどりついたモモをむかえてさりげなくそういいました。
フェナリナーサのおふたりも、モモを目を細めて見つめていました。
「モモは、あっというまに、わしらとつきあいのない別の夢の国の人たちとまで、友だちになってしまったんだばね」

「人間になったモモは、魔法のプリンセスだったころより、もっと素晴らしいものを見つけだすかもしれませんわ」
「うん、その日が楽しみだば……」
おふたりは、これからのモモに、ささやかなかんぱいをしました。

いま、モモは、フェナリナーサを見ることができます。
でも、モモは夢の国のプリンセスではなくふつうの人間です。
モモは人間に生まれてよかったと思いました。

Someday
Sometime

あとがき

私は自分の夢を見たい……夢は実現させるからこそ夢なの……そういって1年半前、ぼくらの前から消え、人間の赤ん坊に生まれかわったモモが12歳になって帰ってきました。モモは人間です。12歳になるまで、ほんとうはあと11年ほど待たないといけないのですが、そうなると作者のほうがモモを書くには歳をとりすぎてしまう心配があるので、やむなく11年をはしょっちゃうことにしました。きっとモモも目を丸くしていることでしょう。でも、その瞳が自分の夢を見つける日を楽しみにしています。さて、近く映像化される予定のモモは、ここに描かれているモモとはちがう前のモモがだれも知らなかった活躍をする話です。前のモモとどこがちがい、どこが成長したのか……見つめていただければと思っています。では、あなたも自分の夢を見つけ実現させられるのを祈って……モモとあなたに幸福を!

首藤剛志

「ウワー、ラクそうなキャラだなぁ」と安易な気持ちではじめた「モモ」(TV)の仕事でしたが、その後、OP(オープニング)・ED(エンディング)の作画、はじめての作画監督、ゲストキャラのデザイン、イラストの仕事など、いろいろな境地を開いてくれました。さらにその間に結婚と、まるでモモがぼくの夢をひとつひとつかなえてくれたみたいですね。モモに感謝してます。これからもビデオに映画にとつきあいがつづきそうだけれども、もっといろんな夢をかなえてくれるといいなあ……。

わたなべひろし

私と「モモ」のかかわりあいといえば原画をほんの少し手伝ったことと、あとはひたすらイラストの色塗り。何枚塗ってもちっとも上達しなくてゴメンナサイ。

けいこ

アニメージュ文庫

それからのモモ

1984年11月30日 初刷
1985年12月10日 2刷

著者　首藤剛志
　　　わたなべひろし＆けいこ
発行者　尾形英夫
発行所　株式会社 徳間書店
東京都港区新橋四―一〇―一　〒一〇五
電話〇三(四三三)六二三一(大代)
振替　東京四―四四三九二番
印刷　大日本印刷株式会社
製本

〈編集担当　三ツ木早苗〉

ISBN4-19-669531-0 C0174（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

★この本を読んでの感想を右記までおよせ下さい。また、著者へのお便りもお待ちしています。

アニメージュ文庫最新刊

機動戦士Zガンダム HAND BOOK 1

池田憲章・徳木吉春編 420円

1話～11話のフィルム・ストーリー、キャラクター名鑑など「Zガンダム」の魅力を完全ガイド！

機動戦士Zガンダム HAND BOOK 2

池田憲章・徳木吉春編 420円

12話～23話のフィルム・ストーリーに加え、フォウ＝ムラサメら女性キャラを特集。描きおろしイラストも満載。

ミンキーモモ 夢の中の輪舞(ロンド)

文／首藤剛志　絵／わたなべひろし 380円

長編ビデオ「夢の中の輪舞」をもとに、首藤剛志が書いた童話。描きおろしイラストもなんと26点。

おぼえていますか 映画「超時空要塞マクロス」より

語り手／河森正治 イラスト／美樹本晴彦 聞き手／片桐卓也 420円

映画「マクロス」までの歩みをドキュメント風に再構成し、魅力の原点に迫る。カラーも72ページついてます！

おやすみ！ わたしのサイボーイ

佐藤元　380円

AM本誌「青シン」の連載でおなじみの元くんが、描きおろし大長編マンガに挑戦。本格SF少女メカものだ！

永遠のフィレーナ 1

作／首藤剛志　絵／高田明美 380円

「ゴーショーグン」の首藤剛志が描く、初のオリジナル大河小説。イラストは「クリィミーマミ」の高田明美。

天使のたまご

押井守・天野喜孝 480円

オリジナル・ビデオ・アニメ「天使のたまご」を天野喜孝のイメージボードでつづる。構成と文は押井守監督。

首藤剛志作品

戦国魔神ゴーショーグン

その後の戦国魔神ゴーショーグン

またまた戦国魔神ゴーショーグン

狂気の檻

4度戦国魔神ゴーショーグン

覚醒する密林

戦国魔神ゴーショーグン　時の異邦人

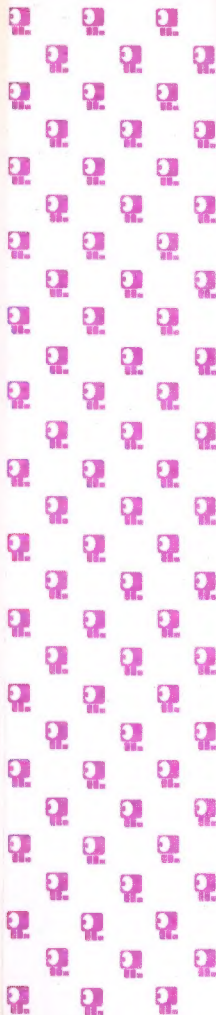
いつかきっとPEACH BOOK

(「ミンキーモモ」より)

それからのモモ

(絵／わたなべひろし&けいこ)

永遠のフィレーナ

カバーイラスト＝わたなべひろし&けいこ
カバーデザイン＝真野薫
カバー印刷＝真生印刷㈱

徳間書店
アニメージュ文庫
ISBN4-19-669531-0　C0174　¥380E　定価380円